

イヌマキの国内向け販路拡大について

～防風林や観賞用などへの利用拡大に向けた取組～

1 課題の目的

匝瑳市を代表する樹木であるイヌマキは耐潮性や耐湿性に優れており、幅広い環境下での生育が可能である。また、イヌマキは当地において、生産しやすいことから生産者の生産意欲が最も高い樹種である。更なる生産振興のためには需要拡大への取組が必要である。その為、全国での利用拡大を図り、今後の生産と販売の活性化を目的とする。

2 課題の背景

- (1) イヌマキは千葉県の県木で生垣や造形樹などとして県民にとっても身近なものである。しかし、関西や東北地方等では使われる頻度は多くはない。そのため、関西等でのイヌマキの利用拡大に向けて、潮害や風害の影響が強い地域での生育状況を確認し、その結果を基に生産振興と販売促進を進めていくことが必要である。
- (2) イヌマキは生態的特性や観察から耐潮性、耐湿性に優れていることが知られている。また、根の張りも比較的強く、沿岸部などのウォータースタイルフロントへの植栽に対しても適しているといわれている。緑化業界への販売促進ではこのような生態的特性に加えて新規性が求められる。当地では赤芽の「匝瑳」と斑入りの「ミウ」が育種され、品種登録されていることからこの2品種で販売促進を行うことが効果的と考えられた。
- (3) 植木生産者では自社生産物が搬入された現場の確認を行うなどして、生育状況や植栽状況を生産にフィードバックする機会が少ない。そのため、生産者と実際の植栽現場を視察し、植栽後の生育や施工の状況把握などイヌマキの環境適応性を確認する必要がある。

3 普及活動の経過

- (1) 全国の緑化関連業者に対する匝瑳市産イヌマキの PR
平成 29 年の 5 月に国内有数の総合緑化業務を営む会社の関東、東北、関西の営業所の社員を匝瑳市の生産者圃場に招き、イヌマキの販売促進のため現地検討会を開催した。これにより招へい業者の取引のある全国のゼネコンや大手造園会社へとイヌマキの在来種を含めた 5 品種について周知することができた。
- (2) 淡路島でのイヌマキ「匝瑳」の植栽
上記の結果、淡路島のパソナグループの所有するリゾート施設の植栽を担当している京都の造園会社へ赤芽のイヌマキ 350 本の納入が決まった。その後、平成 30 年の 4 月下旬に淡路島の現地に植栽された。
- (3) 淡路島での植栽状況の確認と新たな販路の拡大に向けた取り組み
台風 21 号通過後に生産者と仲介卸会社、施工会社、農業事務所の四者で実際の植栽状況とイヌマキの環境適応性を確認した。仲介卸会社本社へ営業訪問することで匝瑳市産のイヌマキを紹介し、関西地域での取引拡大に向けての販売促進を行った。

4 普及(調査)活動で得られた成果

(1) イヌマキの環境適応性の評価

現地では、イヌマキは垣根材料として利用され、カリステモン、ヒメシャリンバイ、キンポウジュ等と混植されていた。イヌマキは全体で 350 本納入され、植付初期に枯死したものが 16 本存在した。聞き取りの結果、灌水設備が間に合わなかったことが大きな要因であることが分かった。また、土壌は真砂土で岩盤等も存在する区画であり、その条件下に適応できる樹種が限定されることがわかった。しかし、活着したものに関しては塩害や台風によるダメージはほとんど見られず、傷みのあるものは高温と水分ストレスが原因と推測された。このことより根が張るまでの間の水分が十分にあれば淡路島のような厳しい環境下での生育についても問題ないことが示唆された。

(2) 塩害・強風に適応する樹種の選定

近年、淡路島は急速にリゾート開発が進んでいる。しかし、淡路島は塩害や強風が強く発生し、植物が生育しやすい環境とは言えない。そのため、海岸線と丘陵地域での植生について調査を行い、塩害や強風に強い樹種について把握することでイヌマキ以外での生産振興ができそうな樹種の選定を行った。



施設周囲のイヌマキを含む植栽状況

(3) イヌマキの新たな利用用途と販路の拡大

淡路島に納入したイヌマキの植栽状況を生産者と仲介卸会社、パソナの植栽担当の造園会社、農業事務所とで確認することで信頼関係が構築できた。イヌマキはグランピング施設*の周囲に植栽されていた。設計コンセプトとして宿泊地周辺での樹木は赤い花が咲くものが集められており、イヌマキでは花は咲かないが鮮やかな赤い新芽があることから取り入れられていた。5月の新芽では鮮やかな赤が発色し、淡路島の環境でも概ね生育に問題がないことがわかり、施工業者も使いやすい商材であることがわかった。今後の取引に関しても今回の信頼関係構築により視察中に新たな注文が入るなど継続的な取引を期待できる結果となった。

*グランピング (glamping) とは自然の中で魅力的 (glamorous) で快適な滞在ができるキャンプ (camping) という意の造語

5 問題点と今後の展開方向

淡路島でのイヌマキの植栽状況を確認したことで、今後のイヌマキの機能的防風林やウォーターフロントでの友好的な活用が示唆された。また、大阪万博 2025 に向けて国内外の来場者への PR を検討していくことで生産者の生産意欲を高めていく。大手の造園業者での発注のロットは 500~1000 本単位となるため、現状の生産量で対応することは難しく、今後、大手の注文に応えるためには繁殖技術の高位平準化や省力化技術の向上が不可欠となる。普及では今後、計画的な生産と販売促進を継続して行っていく。

(匠瑳グループ 普及技術員 吉田 康平)